

音声言語情報処理技術デベロッパーズフォーラム の開催にあたり

旭化成株式会社 音声ソリューションビジネス推進部
庄境 誠

アブストラクト

第2回「音声言語情報処理技術デベロッパーズフォーラム」(略称: SLP フォーラム)を開催するにあたり、オーガナイザーとして、巻頭言を述べる。

A Foreword at Holding SLP Forum Speech Solutions, Asahi Kasei Corporation Makoto Shozakai

Abstract

Here is an organizer foreword for the 2nd Spoken Language Processing Developer's Form(SLP Forum in short).

1. 背景

音声インタフェース技術の実用化の期待は高まっているが、一般利用者が日々の生活の中で音声インタフェース技術の恩恵に浴しているとは言い難い。自動車のカーナビや携帯電話のハンズフリーインタフェースなどでの搭載は進んでいるが、現時点では「おまけ」の機能の位置付けに留まっており、「必須」の機能としての社会的認知は得られていない。

そこで、音声認識や音声合成を始めとする、音声言語情報処理技術の様々なレベルのデベロッパー、即ち、大学、ベンダー、応用システム開発者が一同に会し、音声言語情報処理技術(以下では、簡単のため、SLP と称する)の実用化の加速、魅力的な市場の創出における問題点とその解決方法について、相互に意見を交わす特別企画として、昨年10月の本会において、パネルディスカッション「音声認識技術の実用化」が企画された。音声認識ベンダーを代表して、赤堀一郎(デンソー)氏、渡辺隆夫(日本電気)氏、河井恒(KDDI 研究所)氏、庄境誠(旭化成)、畑岡信夫(日立)氏がパネラーを務め、小林哲則(早大)先生、河原達也(京大)先生、中村哲(ATR)氏、武田一哉(名大)先生、鹿野清宏(奈良先端大)先生にディスカッサントをお願いした。

今年は、昨年、予想以上の盛り上がりを見せた、パネ

ルディスカッションに加えて、2件の招待講演および1件の一般講演を加えることができた。さらに、第2回「音声言語情報処理技術デベロッパーズフォーラム」(略称: SLP フォーラム)と命名され、新たな船出をすることとなった。昨年に引き続き、今年もオーガナイザーとして、本フォーラムのプログラミングをするに当たり、多大のアドバイスをいただいた、SLP 主査の武田一哉(名大)先生、SLP 幹事の大淵康成(日立)氏に深く御礼申し上げます。

2. 招待講演

まず、1件目は、平沢純一(ニュアンスコミュニケーションズ)氏他による「ニュアンスコミュニケーションズの音声ビジネス」である。ニュアンスコミュニケーションズ社は、L&H 社、Philips 社、SpeechWorks 社、ART 社、旧 Nuance 社などの欧米の SLP 技術を結集し、2006年度の売上は450億円にも達する、世界最大の SLP ベンダーである。我々日本人には肌で感じる機会の少ない、欧米型ベンチャー企業のダイナミックかつシビアなビジネス展開の現場の一断片や音声インタフェース普及への課題について忌憚のない意見を披瀝いただけるのではと大いに期待するところである。

もう一つの招待講演は、鹿野清宏先生他による、「音声

情報案内システム「たけまるくん」および「キタちゃん」の開発」の報告である。「たけまるくん」は、大学発の音声による情報案内システムのフィールドテストの成功例と注目を集めている。数年にも渡る運用経験から得られた知見や実用化における教訓などを紹介いただけるものと思う。

3. 一般講演

一般講演として、加藤恒夫（KDDI 研究所）氏他より、今年1月から運用が開始された、携帯電話での音声入力機能「声 de 入力」サービスに関して、「分散型音声認識の商用システム構築」と題して、サービス運用の実態を御報告いただく。

4. パネルディスカッション

音声認識技術の実用化を阻害している要因について、様々な立場からパネルディスカッションにおいて問題提起をしていただき、その解決策を議論したい。

今年は、パネラー、ディスカッサントを昨年のメンバーとは一新し、卓見をお持ちの新たな有識者に御登壇いただくべく、人選を進めた。多少、難航をしたところもあるが、大学、音声認識ベンダー、音声認識応用システム開発者の三者に分類し、5つのマッチメークをすることができた。お忙しい中、快くお引き受けいただいた方々に心から御礼を申し上げる次第である。

まず、最初のパネラーは、石川泰（三菱電機）氏で、プレゼンテーマは、「音声インタフェースのユーザビリティ評価」である。氏は、メーカーのSLP研究者の中でも早くからユーザビリティという側面に着目され、カーナビ向けSLPの定性的定量的評価を進めてこられた。その辺りの苦労話をご披露いただけるものと期待している。ディスカッサントとして、Q&Aの口火を切っていたのは、易傑（コーラス）氏である。氏は、現在、ニュアンスコミュニケーションズ社の音声認識エンジンを利用して、Call Us（コーラス）社でSLPの応用システムの開発に携わっておられる。

第2のパネラーは、神沼充伸（日産自動車）氏で、「自動車用音声インタフェースへの期待」というタイトルでお話いただく。昨年のパネルディスカッションでは、「車載機器メーカーは車両メーカーが要求した仕様に逆らえない、”現在のカーナビの仕様は、ユーザーの視点

が入っておらず使い勝手が悪い”などの辛口の指摘があった。音声インタフェースの車載化の効果と問題点について、車両メーカーの立場からご意見をいただけるものと期待している。これに対するディスカッサントは、河村聡典（東芝）氏である。車載機器向けを中心に組み込み向けの音声認識・音声合成ミドルウェアの事業化に取り組んでおられる立場からコメントいただく。

3人目のパネラーは、中川聖一（豊橋技科大）先生である。先生には、「音声認識の実用化に対する大学の役割」と題して、お話しいただく。未だ、黎明期であり、市場規模の小さなSLPは、メーカーにとって、事業化上の開発負担が大きく、大学からの研究開発支援に大いに期待したいところである。対するディスカッサントは、大淵康成（日立）氏である。メーカーにおける音声認識研究者の立場で、産学連携への期待や要望などを表明いただけるのではないかと想像している。

パネラーの4人目は、磯健一（アドバンスドメディア）氏である。SLP分野における日本の代表的なベンチャー企業に在籍される立場から、「音声認識実用化における課題」と題して、実用化の実例を紹介いただけるとともに、性能モニタリングの重要性に関してご意見を頂戴できるとお聞きしている。ディスカッサントは、伊藤彰則（東北大）先生にお願いした。先生には、大学の視点から実用化の苦労話への問いかけをしていただけるのではないかと期待する。

最後のマッチは、新田恒雄（豊橋技科大）先生と平沢純一氏の組み合わせである。先生は、SLP実用化における標準化の重要性を叫ばれ、標準化に係る研究プロジェクトを牽引されている。当日は、「音声認識実用化における標準化協同作業の重要性」についてお話しいただく。また、氏には、SLPベンダーの立場から、標準化活動に対するご意見を披露いただけるものと思う。

5. おわりに

今年も昨年にも優るとも劣らない自由闊達で熱い議論が戦わされることは想像に難くない。SLP関係者が知恵を出し合い、かつ、競い合い、SLP実用化の歯車を着実に前に回そうではないか。「使って便利で楽しい」必須技術としてSLPが認知され、魅力的なSLP市場が創成される上で、本SLPフォーラムが来年以降も継続され、大きな役割を果たすことを心から願って巻頭言とする。